

# 学部系統別にみた志願者層の推移に関する研究

大学入試センター 岩田弘三・山田文康

## 1. はじめに

1979(昭和54)年度に開始された共通第1次学力試験も、1990(平成2)年度からは大学入試センター試験へと受け継がれ、1992(平成4)年度時点で既に14年が経過している。受験生や大学・学部を取り巻く社会経済的状況も、この間に大きく様変わりしている。それにともない、国公立大学志願者層は大きく変化していることが考えられる。

さらに、1987(昭和62)年度と1990(平成2)年度には、国公立大学の入試制度に大きな変更があった。

1987年度入試改革では、(1)受験機会が複数化されると同時に、(2)1次試験の受験科目が5教科7科目制から5教科5科目制へ移行し理科、社会の各1科目が削減された。

1990年度入試改革では、(1)私立大学の一部が1次試験に参加すると同時に、(2)ア・ラカルト方式、(3)前期と後期で同じ大学を志願できる分離分割方式、を取る大学が一躍増加した。

これら一連の入試改革、及び1次試験での傾斜配点方式の強化、2次試験のウエイトの増加など、最近の国公立大学入試における趨勢は、特定の教科目重視の方向で一致している。しかもこの傾向は今後ともなお拡大していくように見える。

それでは、このような特定の教科目重視の傾向、さらには社会経済的変化は、国公立大学志願者層にどのような変化をもたらしたのだろうか。ただし、一口に国公立大学志願者層の変化といっても、その変化の様相は学部によって異なっている可能性がある。そこで本報告の目的は、昭和54～平成4年度間に、国公立大学志願者層にどのような量的(志願者数)、質的(志願者の特性的)変化があったかを、学部(系統)別に検討することである。

この目的にそくして今回は、(1)志願者数、

出願数、入学者数などの量的変化、(2)男-女、現役-浪人といった志願者の属性別の構成、(3)1次試験5教科の学力など、志願者層の質的变化を明らかにしていく。

## 2. 分析対象

なお、今回分析の対象にするのは、1次試験(1989年度までは共通1次試験、1990年度以降は大学入試センター試験)を受験し、かつ国公立大学2次試験(各大学が課す個別試験)に志願した受験生群である。

今回行う分析では、14の学部系統(小分類)を基本単位とする。さらに、本報告では、文科系、文理混合系、理科系の3分類を用いることがある。(これら学部小分類、大分類に属する、具体的な個々の学部は、参考文献を参照されたい。)

## 3. 分析結果の要点

今回の分析で得られた主な知見は以下のとおりである。

(1)1979～86年度間の国公立大学志願者数は横ばい状態にあった。同様に1987～1992年度間の国公立大学志願者数も横ばい状態にある。しかし、1986年度以前に比べ、1987年度以降の国公立志願者数は増加をみせている(図1)。

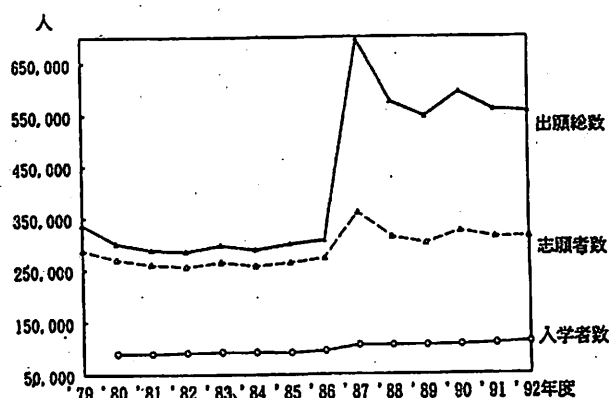


図1. 国公立大学志願者数・入学者数・出願総数

ただし、志願者倍率(志願者数/入学者数)は1979~92年度間ではほぼ一定である。

(2)1987年度以降の志願者数増は、文科系学部で際立っている。

(3)女子志願者数の増加は顕著である(図2)。

(4)国公立大学再受験率(ある年度の国公立大学不合格者に占める次年度の浪人の国公立大学志願者)が低下している(図3)。なお、再受験率の低下は私立大学、短期大学を含めた受験生全般の傾向である(図4)。

(5)もともと理科系学部志願者は数学、理科の学力が高かった。文科系学部志願者は、国語、社会の学力が高かった。このように、理科系学部志願者と文科系学部志願者とでは得意教科が異なっていた。しかし、近年その傾向はさらに進行している(図5)。

(6)さらにその極端な例として、ア・ラカルト方式をとる国公立大学の増加に伴い、文科系学部では理科を全く受験しない志願者が、理科系学部では社会を全く受験しない志願者が増加している。

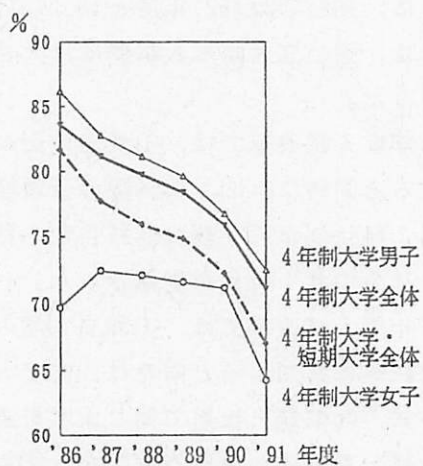
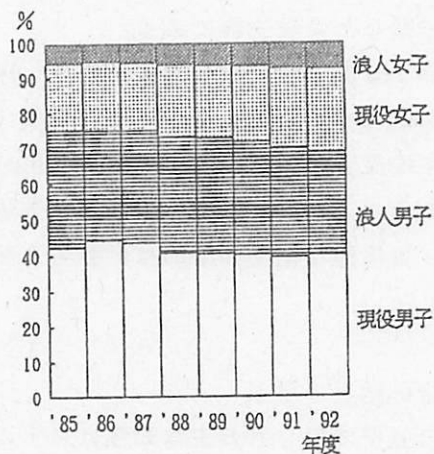


図2. 国公立大学志願者の男女・現役-浪人比

図4. 国公立大学全体の再受験率

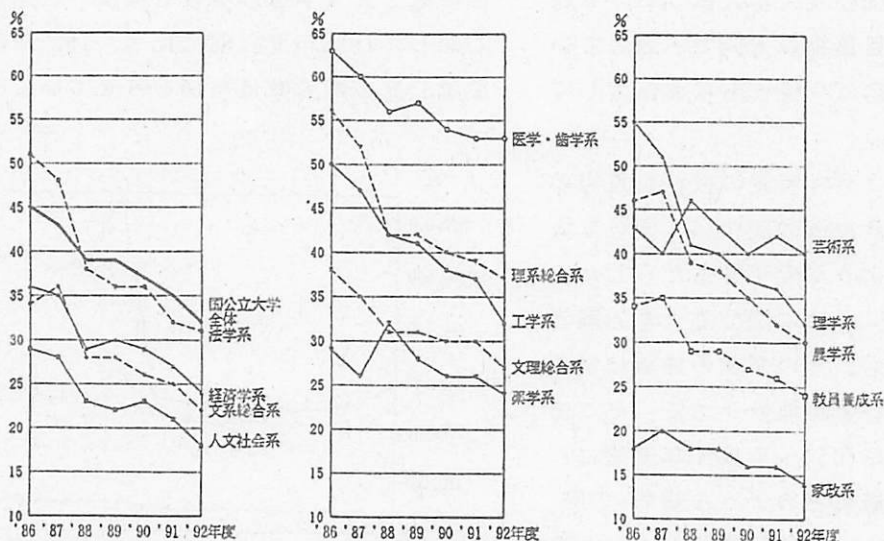


図3. 学部系統別再受験率

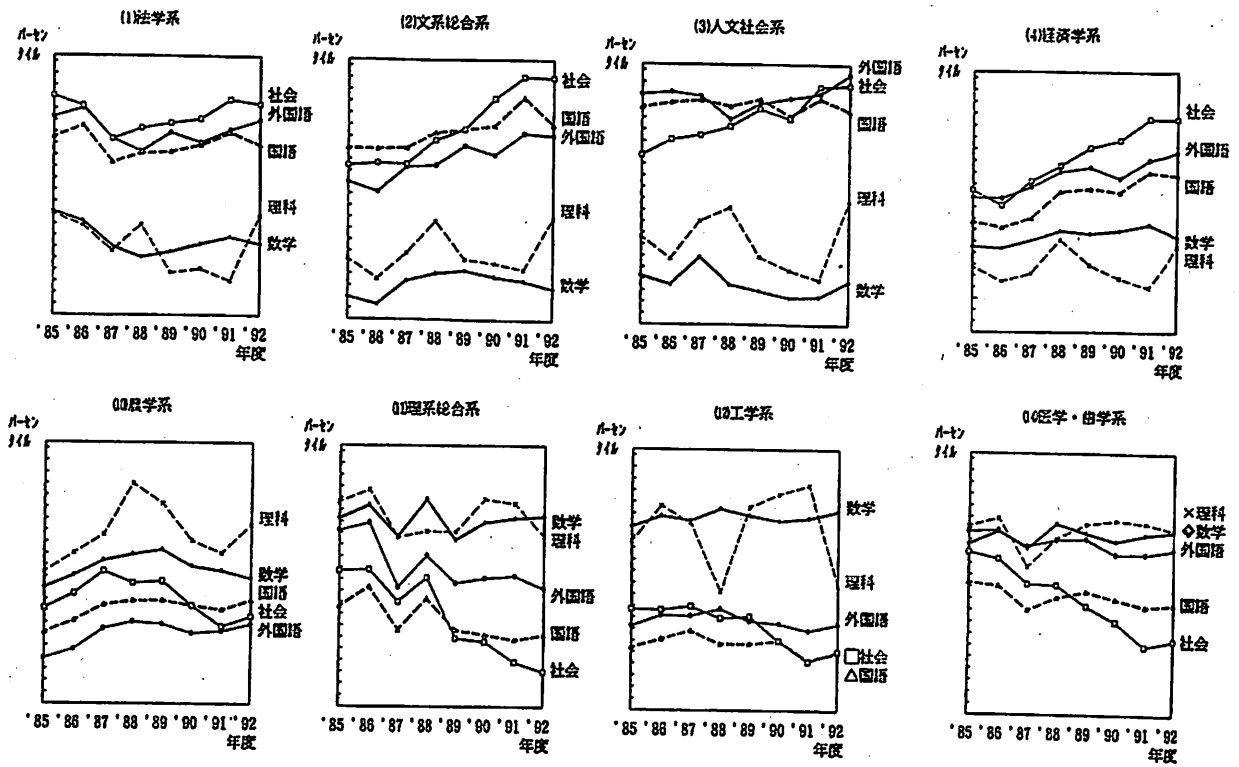


図5. 学部系統志願者の各教科のメジアン

(7)同一年度における文科系学部と理科系学部の併願者，文科系学部から浪人を経て理科系学部への転向者の比率は低下している。

以上の知見は次のように解釈される。

少数の教科目で行う入試を私大型入試と名付ければ，特定の入試教科の重視は，国公立大学入試の一種の私大型入試化とみなすことができる。

1987年度入試改革では，1次試験における受験科目数の削減が行われた。この5教科5科目制への移行は，国公立大学入試の私大型入試化への第一歩であったことになる。この改革を転機として，国公立大学志願者の規模の拡大が生じた。つまり，まず1987年度を境にして，従来の私大専願者の国公立大学への参入が生じた。

さらに，1次試験における傾斜配点方式やア・ラカルト方式の強化，2次試験のウェイトの増加等をとおして，国公立大学入試の私大型入試化は一層拍車をかけられた。

このような国公立大学の私大型入試化に加えて，立地，授業料等の面で，私立大学の魅力が国公立大学に近づいてきたこともあって

国公立大学と私立大学の壁は双方から突き崩されて行くことになった。この結果，浪人を選択するという一般的な受験生気質とあいまって，浪人するよりは私立大学へ進学する国公立大学志願者が増加した。

つまり，以上のような状況の下で，国公立大学と私立大学の両方を睨んで志願する受験生が多くなり，浪人してまで国公立大学へ志願しようという受験生が減少する一方で，一度は国公立大学に志願するといった意味では，国公立大学志願者層は拡大したことになる。

第2に，国公立大学入試の私大型入試化は，国公立大学と外(私立大学)との関係のみならず，国公立大学志願者層内部にも変化をもたらした。この顕著な例は，理科系学部志願者と文科系学部志願者における得意教科の分化現象であり，志願の棲み分け(異なる学部を志望しない)である。

<参考文献>

岩田弘三・山田文康「学部系統別にみた国公立大学志願者層の推移に関する研究」、『大学入試センター研究紀要』No.22, 1983年。